Akita University

発達障害者支援センターにおける祖父母支援†
－センターへの質問紙調査を通して－

今野　和夫*
秋田大学教育文化学部

家族支援は発達障害者支援センターのもっとも大切な役割の一つである．発達障害の孫を持つ祖父母は，自身の子どもと孫をいろいろなことで支援することができるだろう．しかし，発達障害の本質を理解することは祖父母にとって非常にむずかしい．発達障害者支援センターは，祖父母が自身の子どもや孫にとってのよき支援者になるための支援を祖父母に提供する上で，積極的な役割を担うことができよう．

この研究は，支援センターにおける祖父母支援の現状を明らかにすることを試みた．センターのスタッフに祖父母支援に関する質問に答えることを求める質問紙調査が行われた．その結果，多くのセンターが孫に関する祖父母からの相談を受けていた．また多くのセンターが，祖父母を支援するために専門的力量を高める必要があると考えていた．
さらに多くのセンターが，発達障害の孫の養育において非常に大きな負担を担っていると考えられる祖父母からの相談も受けていた．本論では，得られた結果に関連して，実践面での考察もなされた．

キーワード：祖父母支援，発達障害者支援センター，発達障害児

Ⅰ　はじめに

平成17年４月より発達障害者支援法が施行され，それに基づいて全国各地に発達障害者支援センターが設立されている．設置の経緯や運営形態等，色々な点でセンターにより違いはあるが，おおむね設立後の期間はまだ短く，教育・医療・福祉・労働・親の会等の諸機関・団体や，その関係者との共同・連携の基盤作りを含むセンターの機能の定着や充実のために，少数のスタッフが日夜尽力しているのが現状と思われる．

本人たちの交流機会を設けるとか，家族や学校等への訪問による相談や指導を行うところもあるなど，センターによって活動内容に違いも認められるが，就労支援，啓発，情報提供とともに，各種関係者や家族に対する相談機能が重視されている．都道府県知事，教育委員会教育長等への文部科学事務次官・厚生労働事務次官連名による通達「発達障害者支援法について」（平成17年４月１日付け）には，都道府県及び市町村における発達障害者の支援に際しては家族も重要な援助者であるという観点から発達障害者の家族を支援していくことが重要であること，さらに家族ということでは父母のみならず兄弟姉妹，祖父母等の支援も重要であることに配慮すること，と記されている．このことは，センターの家族支援のあり方としても，保護者（多くの場合は親）のみならずそれ以外の家族成員や，個々の家族成員間の関係といった，いわば「家族全体」への支援が重要であること，またそのような支援を可能とする視野や専門性を培うことが必要であることを意味していると言えよう．

ちなみに，平成14年６月13日付けのある新聞（東京新聞）は，学習障害などの子どもを対象としているある学習塾が算数ドリルを作成したことをひと月ほど前に記事にしたところ400件ほどの電話が殺到

2009年２月13日受理
†Support for Grandparents of Grandchildren with Developmental Disabilities in Support Centers for Persons with Developmental Disabilities
*Kazuo Konno, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

Akita University

したが，その約１割は祖父母世代からのものであったと告げている．

また平成15年５月から平成17年３月までの相談者（1728人）についてのある発達障害者支援センターの資料では[1]，その80%を親が占めているが，それ以外では教育関係者，福祉関係者，本人とともに祖父母もまた3%を占めており，その内容は主に孫や夫婦のために何をしてあげられるのかというものであると報告されている．なお，平成20年11月の時点で発達障害者支援センターの数は70を越えているが，センターの相談活動を利用したり，センターがその施設内や地域で行う講座や学習会に参加している祖父母は，全国的に決して少なくないのではないかと思われる．

後に専門家によって発達障害の疑いがあると指摘されたり，実際に発達障害があると診断される子どもであっても，幼い頃には，同年齢の子どもと比べて苦手な点や心配と思われる言動があっても，その子なりの良さや得意なところ，またその子なりの心身両面での育ちを親が日々の生活の中でまったく実感できないというわけではない．また発達障害という名称で括られる障害があるということ自体や，その原因の本質は親の育て方のようなレベルではなく脳の機能にあるということを多くの親は前もって知っていないわけで，障害の受容や理解以前に，そのような障害があるのではないかと懸念したり，そのことで両親で話し合うとか専門機関への相談に一歩を踏み出すということが，まずもって親には決して容易なことではない．さらに障害の疑いや実際の障害が診断された後も，共働きなどもしながら他のきょうだいや家族との日常の営みをあわただしく重ねる中で，障害の気づきにくさ，本質的原因の理解や受け止めのしがたさを乗り越えて障害特性と子どもの立場及び思いを配慮したかかわり方・対処法を親が身につけていくことは，やはり容易なことではない．

一方祖父母は，このような状況において心身両面で大きな負担を負っている親を心理面・実際面・経済面等の色々な側面から支援できる重要なインフォーマルなリソース源と言える[2]．とはいえ，孫の障害やその疑いにはやく気づくとか，孫の障害やその本質の告知を冷静に受け止め理解するとか，親の接し方や家系に原因があると責めることなく，親や孫のためになるようなかかわり方を自ら学び直すといったことは，祖父母にとって容易なことでない．親の共働きや離婚，病気等により家事や育児，保育所・幼稚園・療育機関・小学校等への送迎などにおいてかなりの部分を担っている祖父母においてはなおさらのことである．

それらの容易なさを軽減・克服でき，一方では親や孫から支援されつつ他方では親や孫にとってのよき家族・よき支援者として，同居・別居を問わず祖父母が自身の人生あるいクオリティオブライフを全うできるためには，祖父母の側の立場や祖父母との関係における親の立場を十分に配慮した親への支援のみならず，親とは別な形でなされる専門的支援が，医療や教育，福祉，民間（NPOや親の会を含む）等の諸分野やその協同・連携により，長期的かつ継続的に必要であろう．ちなみにその支援には，例えば，祖父母がコンタクトをとりやすく，また障害や接し方を理解しやすい配慮や工夫がなされている状況での相談や，同じ境遇の祖父母との交流機会の設定なども含まれよう．

発達障害児の家族支援においては，同居・別居を問わず，親に対する祖父母からの支援力を高めることにもつながる祖父母への支援が，ないがしろにされてはならないだろう．

今日，祖父母と孫やその親とがかかわる期間が孫の出生から20年，30年と長い年月に及ぶことは決して珍しくない．そのような状況において，発達障害者支援センターが単独で，あるいは他の諸団体と協力・連携して，祖父母への支援のために果たしうる役割は非常に大きいと考えられる．そこで本研究では，全国の発達障害者センターを対象に，祖父母からの相談，祖父母への支援力向上についての意識，祖父母支援の取り組みの実際，祖父母のことでの親からの相談，孫の養育の負担が非常に大きな祖父母，に関する質問紙調査を実施し，発達障害者支援センターにおける祖父母支援の今後について考察したい．

Ⅱ　方法

1.　対象および調査用紙の配布・回収

(1)　発達障害者支援センターについて

冒頭で少し触れたように，発達障害者センターといっても，県立機関（例えば精神保健福祉センターやリハビリテーションセンター）併設型，社会福祉

Akita University

法人委託型，ブランチ型（例えば複数の社会福祉法人による協働）など，その運営主体・形態にはかなりの違いがある．重視する活動や支援の内容，対象者などについても，相談支援よりも就労支援の重視，幼児・児童よりも青年・成人への支援の重視というように，センター間で一様ではない．とはいえ，祖父母支援をも含む家族支援のあり方の追究は，それぞれのセンターにとって今後も大きな課題であり続けるだろう．その課題への取り組みの一助，ないしはワンステップとなりうると考え，今回の調査ではとりあえず，祖父母支援にかかわる事柄の現状についてまずは全体的な把握を行うことにした．

(2) 調査用紙の送付，記入者等

調査用紙は，2008年11月に，全国のすべての発達障害者支援センター（73カ所）のセンター長宛てで郵送した．50カ所より返送され，回収率は69%（約7割）であった．2009年2月，未返送のセンターに再度調査用紙を配布して協力を依頼し9カ所より回答が得られた．本研究ではこれら59のセンターからの回答（回収率80%）を整理・分析することとした．

調査用紙には，センター長に限らず家族支援に理解のあるスタッフによる回答を希望する旨の文を添えたが，結果，回答者の立場はセンター長が9名，支援員が38名（相談支援員28名，発達支援員5名，就労支援員1名，支援員と記入が4名），心理判定員等の心理職が4名．他に副所長，コーディネーター，ソーシャルワーカー，精神保健専門員，課長，副主幹等の記入があった．あるセンターは，個人ではなく，スタッフ間での話し合いにより回答していた．その話し合いによる回答を除くと，回答者の年代は，30歳未満が8名，30歳台が18名，40歳台が19名，50歳台が8名，60歳台が5名であった．発達障害者支援法の施行（平成17年4月）から間もないこともあってセンターへの勤務年数は比較的短く，調査時点で3年未満という者が6割を越え（1年未満8名，1年から2年未満15名，2年から3年未満14名），5年未満ではほぼ9割（52名）であった．

2. 調査用紙の質問内容

質問は，選択肢からの選択についてその理由等の付記（自由記述）を求めているものも含め，全部で12問であった．12問の内訳は，①祖父母からの相談に関するもの，②祖父母に対する支援に関するもの，③祖父母のことでの親からの相談に関するもの，④孫の養育の負担が非常に大きな祖父母に関するもの，である．

なお本研究では，「親」という言葉を「母親や父親」を指す言葉として用いているが，「祖父母」という言葉についても「祖父や祖母」を指す言葉として用いている．

Ⅲ 結果

1. 祖父母からの相談

(1) 祖父母からの相談の有無

「来所したりして直接的に，あるいは電話やメールなどを利用して間接的に，祖父母（祖父や祖母）が相談してくることがあるか」の質問に対して，「まれにある」との回答が58%（34件）と比較的多く，次いで「ときどきある」が36%（21件）であった．これらに「よくある」（2件）を含めて，たいがいのセンター（57件）が祖父母からの相談を経験していた．

表1 来所・電話等による祖父母からの相談の有無

イ．ない	1（1.7）
ロ．まれにある	34（57.6）
ハ．ときどきある	21（35.6）
ニ．よくある	2（3.4）
無記名	1（1.7）

n＝59（ ）内の数値は%

(2) 祖父母からの相談内容

上で「ロ」「ハ」「ニ」を選択した場合は，あらかじめ筆者が設定した諸項目より，実際にあった相談内容の選択が求められた（複数選択可）．

その結果（表2），「孫について感じる異常について専門的な意見を求めるもの」が，82%（47件）という他の項目よりも一段と高い率で選択されていた．

続いて選択率が高いのは，いずれも50%台（33件～25件）で「孫のために，自分がどのようなことをしてやれるのかについて」（33件），「孫の親などから伝えられた障害について，詳しく知ろうとするもの」（32件），「孫に対する自分の接し方について」，「孫の将来について」であった．

さらに40%（23件）から30%台が，「障害の改善の可能性について」と「孫に対する親の接し方について」，「孫の親のために，自分がどのようなことを

Akita University

してやれるのかについて」,「孫に対する専門的な指導法について」,「障害の原因について」(18件. 32%) であった.

引き続き30%弱が「就学先の選択について」(16件), 10%台が「孫に対する自分の気持ちについて」や「孫の両親間の関係について」,「療育機関の選択について」,「自分と孫の親との関係改善について」,「色々問題が起きたときの自分 (祖父母) の相談先について」であった.

なお「その他」としては,「孫の不登校」とか「親の理解がなく相談機関に行こうとしない」,「自分も孫と同じ障害をもつと思うので自分自身が相談した方がよいか」というような内容が記されていた.

表 2　来所・電話等による祖父母からの相談内容 (複数選択可)

・孫について感じる異常について, 専門的な意見を求めるもの	47 (82.5)
・孫のために, 自分がどのようなことをしてやれるのかについて	33 (57.9)
・孫の親などから伝えられた障害について, 詳しく知ろうとするもの	32 (56.1)
・孫に対する自分の接し方について	31 (54.4)
・孫の将来について	31 (54.4)
・障害の改善の可能性について	23 (40.4)
・孫に対する親の接し方について	23 (40.4)
・孫の親のために, 自分がどのようなことをしてやれるのかについて	22 (38.6)
・孫に対する専門的な指導法について	20 (35.1)
・障害の原因について	18 (31.6)
・就学先の選択について	16 (28.1)
・孫に対する自分の気持ちについて	10 (17.5)
・孫の両親間の関係について	10 (17.5)
・療育機関の選択について	9 (15.8)
・自分と孫の親との関係改善について	8 (14.0)
・色々問題が起きたときの自分 (祖父母) の相談先について	6 (10.5)
・その他	6 (10.5)

n＝57 ( ) 内の数値は%

(3)　祖父母からの相談の増加傾向

「最近, 祖父母からの相談が増えつつあるか」の質問に対して, 76% (45件) が増えていないと回答し,「やや増えている」は20% (12件) であった (表 3).

後者に対してやや増えていると考える理由の記述を求めたところ, 全件 (12のセンター) より回答があった. ちなみにその内容は, ①状況を客観的に見られるといった「祖父母の立場上の独自性」, ②インターネットなどによる情報獲得の容易化やそれに伴う心配の増大といった「祖父母の側の変化」, ③母親の就労や親の養育能力の低下といった「家族の状況」, ④メディアの影響, センターの周知や活動の充実などの「その他」の 4 つのカテゴリーに整理可能と思われた (表 4).

表 3　最近における祖父母からの相談の増加傾向

イ. はい. かなり増えてきている	
ロ. はい. やや増えてきている	12 (20.3)
ハ. いいえ. 増えてはいない	45 (76.3)
無	2 (3.4)

n＝59 ( ) 内の数値は%

表 4　祖父母からの相談の増加傾向の理由 (複数の内容に言及しているセンターもある)

＊祖父母の立場上の特殊性
・祖父母の方が両親より状況を客観的に見れるところがあり, 当事者として困っている, 心配している.
・孫に対する愛情と, 現実を客観的に見て, 率直に「行動に対する疑問」を見ることができる立場にある.

＊祖父母の側の変化
・子育てに積極的な祖父母が増えているから.
・インターネットや書籍などで簡単に情報を得られるから.
・祖父母の積極的な障害理解が進みつつあるため.
・パソコンを使うことのできる祖父母が増え, 自分で簡単に情報を収集することができるようになったこと. (発達障害に関する情報を多くお持ちで, お孫さんの発達について心配されている方が多い)
・自分で障害を勉強している祖父母が増えてきている.
・子ども任せにせず積極的に障害に関わろうとしている.

＊家族の状況
・共働きが多く日中子どもの面倒を見ている祖父母が多い (3).
・孫を実際に見ている.
・親の養育力が低下していること.

Akita University

・親と祖父母との関係が密着していること.
・親自身の精神不安 etc があること.
・両親よりも先に相談のため来所されることがあるからと考えられる.
・親がなかなか相談しないため見るに見かねて祖父母が相談してくる.

＊その他

・メディアの影響の可能性が考えられます．テレビで自閉症の特集を見て，お孫さんと重なる特性があったと話された方がおられました.
・祖父母にもセンターの存在が知られてきたこと.
・来所不可能ないし遠隔地の場合はセンターから出向いていること.
・市や町が祖父母をセンターに紹介するケースが増えていること.
・医療機関とセンターとの連携が進んできていること.
・TV や県の広報だよりなど一般の広報を通じて知る機会が増えたから.
・県外や市外に別居している場合，発達障害と聞かされ心配になって.

2. 障害のある孫をもつ祖父母に対する支援について

(1) 祖父母に対する支援力を高める必要性

所属センターが「祖父母への支援力を高める必要性があると思うかどうか」との質問について，大多数が肯定している（86%．51件）．その程度では,「強くそう思う」との回答が少数（3 件），「そう思う」が37%（22件），「少しはそう思う」が44%（26件）であった.「そうは思わない」も14%（8 件）近く認められた.

一方，表 6 には，この質問についての回答理由の記述を求めた結果が記してある.

まず「強くそう思う」については，祖父母が子どもの障害を認めない，理解しない，逆に親より先に気づくといったことが，子どもに対する見方やかかわり方における親・祖父母間のくい違い，親への非難，ひいては親と祖父母の関係の悪化をもたらしているとの現状認識がその選択理由となっている．さらに，母親支援の充実のため，あるいは療育者の一人と位置づけて，祖父母とかかわろうとする施設の姿勢が伺われる.

次に「そう思う」に目を転じると，親に対する協力者・支援者としての祖父母への期待とともに，共働きや母子家庭，親自身の障害といった事情ゆえに大きな役割や負担を担っている祖父母の存在の認識，あるいはそのような祖父母に対するセンターとしての支援の必要性の認識といったことが，その選択理由になっている.

さらに「少しはそう思う」については，親自身がPDDやうつ病で子どもの養育が困難な事態にあるために養育のキーパーソンとなっている祖父母がおり，そのような祖父母への対応が必要となっていること，子どもの障害について祖父母が理解していないために追いつめられている親や祖父母から適切な関わりを受けていない子どもが現にいるということ，支援力を高める必要性は認めるが祖父母からの相談はさほど多くないということ，当面は保護者への支援の充実が大切だが今後祖父母からの相談が増えると思われること等が，その選択理由になっている.

最後に「そうは思わない」については，祖父母にことさら力を入れるのではなく親や家族全体への支援を行うことや，そのための力をセンターとして高めることの必要性の認識が，その選択理由になっている.

表 5　祖父母に対する支援力を高める必要性

イ．はい．強くそう思う	3（ 5.1）
ロ．はい．そう思う	22（37.3）
ハ．少しはそう思う	26（44.1）
ニ．いいえ．そうは思わない	8（13.6）

n＝59（ ）内の数値は％

(2) 祖父母に対する支援力を高めるために求められること

次に表 7 には，祖父母に対する支援力を高める必要性があると「強くそう思う」,「そう思う」,「少しはそう思う」と回答した場合に（表5），支援力を高めるためにどのようなことが求められるかの選択を求めた結果が記されている.

筆者があらかじめ設定した項目の中で,「祖父母への対応や助言の仕方の検討」がもっとも高い率で選択されていた（75%．38件）．ついで「祖父母の

Akita University

表6　祖父母に対する支援力を高める必要性：選択理由

＊「強くそう思う」理由（3つのセンターが記入）

・祖父母が直接相談してくることは多くはないが，親と祖父母の接し方が同じでない（祖父母から「親のしつけがなっていない」と言われるなど）場合や，祖父母が親より先に気づく場合もあるため．

・3世代家族においてはしばしば祖父母と父母（どちらか）が子どもの見立てについて対立する．多くの場合，母親が追い込まれている．我々は母親支援を重視しているので，その為にも祖父母の気持ちも聞きながら，母親支援を補充していくことが大切．

・同居している祖父母も多いが，否認したまま両親（嫁）と祖父母の関係が悪化する．障害特性や育て方の問題ではないなどを理解してもらう必要がある．療育者の一人として特性に応じた関わりをしてほしいため．

＊「そう思う」理由（18のセンターが記入）

・私どものセンターでは発達障害についての相談機関です．そのため本人やその家族を支えるマンパワーの存在の必要性を感じています．

・家族の理解は支援の基盤．・祖父母の理解や協力は，大きな力になるから．

・発達障害のある人への支援は，親，祖父母等の直接かかわる人に対する支援が大切である．

・一人の孫について4人の祖父母がいると考える．親と同じように共通認識を持っていただく，支援への関心を持っていただくという点で必要だと思います．

・障害についての理解者が一人でも多い方が暮らしやすくなるから．

・年齢が高くなるほど，親子関係がむずかしくなっているケースもあり，そのような場合は，親以外の協力が必要になってくるし，レスパイトのようなところがあった方がよいと考える．

・祖父母の協力の仕方によって親の養育が変化するため．

・両親の悩み，不安の相談相手になってほしい．

・その家族を支える支援者でもあるため．

・親に対する影響力がある．

・両親にとっても子どもにとっても心強いサポーターとなり得る存在と考えている．

・家庭内での課題解決力の向上のため．

・発達障害児を抱える両親のサポーターとして，具体的な支援（母の相談相手，きょうだいの一時的な預かり等）が親に負担なく対応してもらえる存在なので．

・親自身がASで支援を必要としている．保育所等との橋渡し．キーパーソンになっている場合もある．

・祖父母に特化する必要はないまでも，家族の支援者として祖父母の方も一緒に協力していける体制づくりが重要と考えるため．

・本県は三世代同居家族が多く，両親が子どもの発達障害を理解しても祖父母の理解や協力を得られないという例が散見される．医療機関や相談機関に行くことにも同意してくれないという話しも聞こえてくる．

・祖父母が相談に来るケースは親の養育能力に問題があることが多く，親が支援のキーパーソンにならないこともあるため．

・両親の育児・教育力が弱い場合には，祖父母の協力が必要である

・祖父母の影響力が大きい場合には理解を求めなければならない．

・研修会に参加希望された祖父母がいたため．

・共働きが多く子どもを直接見ている．

・共働きや母子家庭の増加．

・両親共働きの割合が高いために，親と同居している場合，日中の主たる養育者が祖父母であるケースも少なくないため(2)．

・両親が働いている家が多く，同居している家庭は，祖父母が接している時間が長い．

＊「少しはそう思う」理由（18のセンターが記入）

・祖父母の理解が得られないため苦しんでいる母親が多いと感じるため．

・家族を支える必要があるため．

・基本は親へのサポートですから，親を通しての祖父母の理解が深まっていくのが理想でしょう．また祖父母には祖父母の役割（孫に愛情を注ぐ）もありますし．ただ，親が養育困難で祖父母がキーパーソンとなるケースもあるので，その場合は，祖父母へのサポートが必要になります．（保護者として祖父母が位置する）

・相談件数はあまり多くなく，今のところ対応できていると思われる．

・最近，父母特に母がPDD，「うつ病」のケースが増えてきており，その場合祖父母の協力や理解は欠かせない．

Akita University

・ニーズがさほど多くないこと.
・高齢であること等. 本人（当事者）の身近な支援者になりにくいため.
・あまり相談件数もないため, 支援の必要性はあると思うが強くはない.
・現在も相談は受けており, 研修会等にも参加される方もおられるが, まずは親からということで, その子への支援を何とかしていかねばならないので, 祖父母からの相談や祖父母同士の集まり等も充実できれば理想である. 兄弟間などは保護者団体等でも行っており, 支援センターだけでなく, 地域の相談センターとも協力しながらやっていきたいと思っている. またむしろ, こちらよりも, 市町村窓口や地域の相談支援事業者へ相談に行かれているケースの方が多いように感じられる. そういった関係機関と情報共有しながら進めたい.
・相談がそれほど多くはない.
・対象児に直接関わる親に対する支援に帰結するため.
・孫への思いが強いために無理にやらせてしまう, 甘やかしてしまうなど, 適切な関わりがむずかしいように感じるので, 祖父母も孫について知る機会があればと思う.
・父母以上に祖父母が障害を理解あすることがむずかしいため.
・障害のある子に何らかのかたちで関わるため.
・広い意味での家族支援としては必要と思う. 当支援センターはこども療育センター内に併設されている関係で主な支援対象者が学齢期から成人となるため, 幼児期ほど祖父母の育児支援のウエイトが大きくない.
・病気ではなく障害であるということの捉え方. 病気のように治るものではないということについて.
・障害特性の理解. ・親のしつけが理由ではないこと. ・親への援助. ・時代背景から発達障害児者の生きにくさに対する理解.
・当事者を支援する人は一人でも多い方がよい.
・まずは保護者への支援の充実が大切だと思うが, 今後, 祖父母からの相談も増えてくると思われるので.
・家庭環境や家族の状況にもよると思います.
・祖父母といっても個別事情によって大きく異なると思われます. 同居か別居か, 父方か母方か, 片親か両親がいないか, 経済的な影響力, 父母への発言力等. 一概に「祖父母」ではくくれません. ただし, 最も身近な養育者である母親を孤立させないという点では, 祖父母への正しい理解は必要と思われます.
・障害をもつ子を育てる親の負担は非常に大きく, 祖父母の無理解がさらに親を追いつめてしまうと考えるため.
・祖父母に対してと限定する必要はないが, 両親, 祖父母, その他の家族などいろいろな立場からいろいろな相談が寄せられている現状から. どのような相談にも対応できるような支援が必要.
・家族関係において祖父母からの受容が大切だと感じる.

＊「そうは思わない」の理由（7つのセンターが記入）
・当センターでは祖父母だからという支援の展開をしていないから. 全体的な支援力の向上に努めていく必要があると思っている.
・基本的には両親への支援を充実することを考えている. 父母のどちらかがいない, またどちらもいない場合は, 両親への支援と同様に祖父母への支援を行っている.
・総数として少ない. ・祖父母よりも保護者（孫の親）への支援力を高める方が優先. ただし理解があれば, 家族の支援力は高まると考えられる.
・祖父母に特に力を入れてというわけではなく, 祖父母を含めた保護者に対する支援ということで考えている.
・親への支援と同じ支援を行っています.
・主な対象を18歳以上の成人としているため.
・まず保護者への支援力を高めることが重要.

思いを実際に聞く」と「祖父母に対する情報提供のあり方の検討」とが半数ほどの選択であった.

さらに, 30%台の選択が「障害の有無によらず, 孫やその親にとって祖父母が基本的にどのような役割を果たしうるのか学ぶ」,「祖父母の心理についての学習」,「障害児をもつ親のために祖父母たちが行っている支援の現状を把握する」, 20%台の選択が「他のセンターにおける祖父母支援の現状を知る」であった. なおその他としては,「障害についてわかりやすく説明するスキル」,「地域への広い普及・啓発活動」が挙げられていた.

(3) 祖父母に関する研修会をセンター内の職員間で行う必要性について

センター内の職員間による研修会の必要性は半数ほど（49%. 59件中29件）で認められていた. 一方実際の開催については,「むずかしい」（34%. 20件）

Akita University

表7　祖父母に対する支援力を高めるために求められること（複数選択可）

・祖父母への対応や助言の仕方の検討	38（74.5）
・祖父母の思いを実際に聞く	24（47.1）
・祖父母に対する情報提供のあり方の検討	23（45.1）
・障害の有無によらず，孫やその親にとって祖父母が基本的にどのような役割を果たしうるのか学ぶ	19（37.3）
・祖父母の心理についての学習	17（33.3）
・障害児をもつ親のために祖父母たちが行っている支援の現状を把握する	16（31.4）
・他のセンターにおける祖父母支援の現状を知る	12（23.5）
・その他	3（ 5.9）

n＝51（ ）内の数値は％

との回答が「今後開催したい」（12％．7件）を大きく上回っていた．なおすでに開催しているとの回答が2件あったが，その詳細（研修会の時期・テーマ・成果・課題等）に関する記入の求めに対しては「祖父母のことが日常的に話題となっている」と記しており，研修会というようなあらたまったものとしては開催されていないことが示唆された．

一方，「必要性を感じない」（29％．17件）や「わからない」（20％．12件）のような，必要性の認識には至らない回答も半数弱認められた．

表8　祖父母に関する研修会をセンター内の職員間で行う必要性について

イ．必要性を感じており，すでに開催している．	2（ 3.4）
ロ．必要性を感じている．今後研修会を開催したい．	7（11.9）
ハ．必要性を感じているが，研修会を実際に開催するのはむずかしい．	20（33.9）
ニ．必要性を感じない．	17（28.8）
ホ．わからない．	12（20.3）
無回答	1（ 1.7）

n＝59（ ）内の数値は％

(4)　祖父母を主な対象とした学習会や交流会のようなものの開催の必要性

半数を明らかに上回る率（61％．36件）で開催の必要性が認められていた．しかし，実際の開催については，「今後検討することはむずかしいだろう」（42％．25件）が「実現を検討したい」（19％．11件）を大きく上回っていた．ちなみに，「講演会等には多くの出席がある」や「親向けの研修会への祖父母の参加を促すよう，父母にお願いしたことがある」との一文も，質問紙の余白に付記されていた．

一方，「必要性を感じない」も15件（25％）あるが，そのうちの1件には，「個別の事情により支援の仕方が大きく異なるので多くの方を対象とした研修や学習会の開催には疑問がある」と付記されていた．

さらに「その他」の選択について，「まだ（祖父母よりも）父母に対する学習会や研修会を充実させたい時期である」，「家族の集まり，勉強会に祖母も参加しているので」，「祖父母だけ対象の学習会は親の会で取り組んでいるものがあり，支援センターとしてはまだまだ対象を広くして啓発に努力する必要がある」，との付記があった．

表9　祖父母を主な対象に学習会や交流会のようなものを開催する必要性について

イ．必要性を感じており，すでに開催している．	2（ 3.4）
ロ．必要性を感じている．開催できるように今後検討したい．	11（18.6）
ハ．必要性を感じているが，開催を今後検討することはむずかしいだろう．	25（42.4）
ニ．必要性を感じない．	15（25.4）
ホ．その他．	8（13.6）

n＝59（ ）内の数値は％

(5)　祖父母たちが一緒に学習したり交流したりできる機会

どのような組織や団体が主催するかは別として，障害のある子どもを孫にもつ同じ立場の祖父母たちが一緒に学習したり交流したりできる機会があればよいと思うかを問うたところ，そのような機会を望む回答がほとんどであった．またその強さについては，「強くそう思う」（7件）と「そう思う」（29件）を合わせた件数が，「少しはそう思う」（21件）の件数を大きく上回っていた．

表10　祖父母たちが一緒に学習したり交流したりできる機会

イ．はい．強くそう思う．	7（11.9）
ロ．はい．そう思う．	29（49.2）
ハ．はい．少しはそう思う．	21（35.6）
ニ．いいえ．そうは思わない．	2（ 3.4）

n＝59（ ）内の数値は％

Akita University

(6) 親向けの学習会における祖父母に関するテーマの取り上げ

センターの親向けの学習会で祖父母に関するテーマを取り上げたことがあるとの回答は，1件のみであった．一方，半数以上（54%．32件）は，「学習会で祖父母のことが自然に話題となったことはある」と回答していたが，「話題となったこともない」との回答も30%（18件）ほどあった．親向けの学習会自体を行っていないとの回答も7件あった．

表11 親向けの学習会で祖父母に関することを主たるテーマとして取り上げたことの有無

イ．はい．	1（1.7）
ロ．いいえ．しかし親向けの学習会で，祖父母のことが自然に話題となったことはある	32（54.2）
ハ．いいえ．親向けの学習会で，祖父母のことが自然に話題となったこともない．	18（30.5）
ニ．いいえ．これまで親向けの学習会も開催していない．	7（11.9）
無回答	1（1.7）

n＝59（ ）内の数値は%

3. 祖父母のことでの親からの相談

(1) 親からの相談の有無

祖父母のことで，親から直接ないし電話やメールなどで間接に，何か相談を受けたことはないとの回答も少し（5件）あったが，ほとんどは相談を受けた経験を持っていた．一方，その頻度については「まれ」（56%）が半数以上と比較的多いが，「ときどき」（29%．17件）や「よくある」（4件）との回答も得られた．

表12 祖父母のことでの，親からの相談の有無

イ．ない	5（8.5）
ロ．まれにある	33（55.9）
ハ．ときどきある	17（28.8）
ニ．よくある	4（6.8）

n＝59（ ）内の数値は%

(2) 親からの相談内容

(1)で「まれに」，「ときどき」，「よくある」と回答した場合，あらかじめ筆者が設定した諸項目から実際にあった相談内容を選択するよう求められた．

その結果（表13），「子どもの障害を受け容れられない祖父母への対応」が90%（54件中50件）を越えるもっとも高い比率で選択されていた．また70%台から50%台という半数以上の比率なのは，「子どもに対する祖父母の接し方への不満と対応」（42件．78%），「祖父母に対する子どもの障害の説明の仕方」（37件．69%），「障害の原因について，自分（親）を責める祖父母への対応」（56%．30件）であった．

さらに「自分の配偶者とその実親（例えば，父親とその実母）との関係についての不満と対応」についてが17件，「情報をたくさん提供しようとする祖父母への対応」についてが6件となっていた．「その他」には，「祖父母が発達障害なのではないか」や「発達障害があると思われる祖父母への援助法」といった記載があった．

表13 祖父母のことでの親からの相談内容（複数回答可）

・子どもの障害を受け容れられない祖父母への対応	50（92.6）
・子どもに対する祖父母の接し方への不満と対応	42（77.8）
・祖父母に対する子どもの障害の説明の仕方	37（68.5）
・障害の原因について，自分（親）を責める祖父母への対応	30（55.6）
・自分の配偶者とその実親（例えば，父親とその実母）との関係についての不満と対応	17（31.5）
・子どもの障害や指導のことで，情報をたくさん提供しようとする祖父母への対応	6（11.1）
・その他	2（3.7）

n＝54（ ）内の数値は%

(3) 親からの相談の増加傾向

最近，祖父母に関係した親からの相談が増えているかを質問したところ，多く（85%．50件）は増えていないと回答した（表14）．「やや増えている」との回答（7件．12%）に対してはその背景の記述を求めたが，その結果（子育てへの祖父母の関与の増大，親からの相談件数の激増や相談機能の充実，発達障害についての祖父母世代の未周知，等）の詳細を以下に記した．

・祖父母世代が若く子育てにかかわる機会が多いためではないか．
・親からの相談件数が激増し，また相談機能が充実し，口には出せなかった祖父母についての悩みを親が発露しやすくなったのではないか．

Akita University

・祖父母が養育に何らかの形で関与しているにもかかわらず，発達障害についての情報が祖父母世代には十分周知されていないこと．
・共働き世帯が多く子どもを祖父母に見てもらっていることが多いため，祖父母の無理解などの相談がたくさん出ている(2)．
・親と祖父母とで，子どもの障害特性や対応について共通理解が十分に図られないこと．
・遺伝的な背景．孫が診断を受けたことで，その孫に祖父母がよく似ていることに親が問題意識を持つ．

表14　祖父母に関係した親からの相談の増加傾向

イ．はい．とても増えている．	
ロ．はい．やや増えている．	7（11.9）
ハ．いいえ．増えてはいない．	50（84.7）
わからない・無回答	2（3.4）

n＝59（）内の数値は％

4. 障害のある孫の養育に関わる負担が非常に大きな祖父母について

(1)　負担の大きな祖父母の存在

「センターに相談してくる祖父母の中には，親の離婚や病気など様々な事情によって障害のある孫の養育にかかわる負担が非常に大きくなっており，親代わりをしているといった方がよいような祖父母がいますか」との質問に対して，そのような祖父母はいないとの回答は6件と少なく，そのような祖父母がいるとの回答が多くを占めていた（53件．90%）．その数は「1人か2人」と少ないところが比較的多いものの（23件．39%），「3人か4人いる」（19件．32%）と「5人以上いる」（11件．19%）を合わせると半数近くになっている．

(2)　負担の大きな祖父母に対する印象

(1)において，負担の大きな祖父母が「3人か4人」あるいは「5人以上」いると回答した場合（30件）に，その祖父母の精神面，体力面，健康面等の8つの点についてどのような印象を持っているのかを問うた結果が，表16に記されている．

表15　負担が非常に大きな祖父母

イ．はい（1人か2人はいる）	23（39.0）
ロ．はい（3人か4人はいる）	19（32.2）
ハ．はい（5人以上いる）	11（18.6）
ニ．いいえ（いない）	6（10.2）

n＝59（）内の数値は％

まず精神，体力，健康，および経済のどの面についても，祖父母の大変さがほとんどの回答者により感じ取られていた．また，大変であると「少し思う」よりも「そう思う」や「強くそう思う」との比率が顕著に高くなっていた．特に体力的側面で，「そう思う」（9件）よりも「強くそう思う」（19件）の選択率が顕著に高い傾向が認められた．

表16　養育に関わる負担が非常に大きな祖父母についての印象　「ロ」あるいは「ハ」＝30

	イ．強くそう思う	ロ．そう思う	ハ．少しはそう思う	ニ．そうは思わない	ホ．わからない
①精神的に大変である	14（46.7）	14（46.7）	2（6.7）		
②体力的に大変である	19（63.3）	9（30.0）	2（6.7）		
③健康面で大変である	15（50.0）	11（36.7）	4（13.3）		
④経済的に大変である	3（10.0）	16（53.3）	8（26.7）	1（3.3）	2（6.7）
⑤自身の生活というものがない	3（10.0）	14（46.7）	5（16.7）	1（3.3）	7（23.3）
⑥知り合いや友人などから孤立しがちである		8（26.7）	8（26.7）	4（13.3）	10（33.3）
⑦そのような祖父母が存在すること自体が，障害児の医療や教育，福祉等の関係者の間ではあまり知られていない	1（3.3）	6（20.0）	9（30.0）	9（30.0）	5（16.7）
⑧そのような祖父母に対する支援の必要性を，障害児の医療や教育，福祉等の関係者は認識する必要がある	6（20.0）	19（63.3）	3（10.0）		2（6.7）

（）内の数値は％

Akita University

「自身の生活というものがない」については半数（14件，47%）が「そう思う」とし，「強くそう思う」はごく少数（3件），「少しはそう思う」も5件であった．「わからない」との回答も7件（23%）あった．

「知り合いや友人などから孤立しがち」については，「強くそう思う」の回答はなく，「そう思う」（8件），「少しはそう思う」（8件），「わからない」（10件）がほぼ同数であった．少数（4件）であるが，「そうは思わない」との回答もあった．

「存在自体が各種関係者からあまり知られていない」については，「強くそう思う」（1件），「そう思う」（6件），「少しはそう思う」（9件）で全体の半数（16件）を占めたが，「そうは思わない」（9件）や「わからない」（5件）との回答も同様に半数あった．

最後に，「祖父母支援の必要性についての各種関係者による認識の必要性」については，「強くそう思う」（6件）や「そう思う」（19件）といった共感度の強い回答が多く認められた．

Ⅳ　考察

1.　祖父母への支援

頻度的には「まれにある」がもっとも多いが（59件中34件），「ときどきある」（21件）や「よくある」（2件）などの回答からは，祖父母からの直接的ないし間接的相談が「あたりまえのこと」になっているセンターも決して少なくないことがうかがわれた．ちなみに「まれにある」としたある回答者は，所属センターについて，平成18年4月にセンターが開設してからの2年半の間に，祖父母から約40件（家族からの相談の1%）の相談があったと付記している．

また相談の内容は，自分と孫の親の関係や，孫の両親の関係，色々問題が起きたときの自分の相談先などを含めて，広い範囲に渡っていることが確認できた．関連して，孫について感じる異常や孫の障害，孫のために自分がやれること，自分の接し方，孫の将来，等についての相談は，半数を超えるセンターが受けていることもうかがえた．

センター内で職員間で祖父母に関する研修会を行う必要性を感じていなかったり，必要性を感じてもその実現はむずかしいという状況のセンターの方が，研修会の開催を前向きに考えるセンターよりも明らかに多いということが示唆された．とはいえ，祖父母と親や子どもとの関係，親の共働きや母子家庭などの家族の状況等についての現状認識に根ざして（表6），祖父母への支援力を高める必要性を，程度の差はあれ多くのセンターが肯定していることもうかがえた（表5）．

支援力を高めるために必要なこととしては「祖父母への対応や助言の仕方の検討」や「祖父母への情報提供のあり方」といったいわばスキル的ないし実際的な側面が，「孫やその親にとっての祖父母の基本的な役割を学ぶ」とか「祖父母の心理を学ぶ」などの理論的・基本的な面よりも，明らかに多く選択されていた（表7）．たとえ研修会のような改まった形を作ることができなくても，祖父母からの相談内容やその祖父母の家族内での位置，祖父母への対応の内容や方法，対応の結果等について，職員間で情報を共有することやアドバイスし合うことを大切にして，また可能なら信頼しうる複数の祖父母から祖父母支援について助言を得る機会を設けるなどして，スキル的・方法的力量とともに，その土台となる専門的知見の深化をはかっていくことが望まれる．

センター独自で祖父母を主な対象として学習会や交流会のようなものを開催することについて，開催できるように今後検討したいとの回答もあったが（11件），必要性を感じていなかったり（15件），感じながらも開催を今後検討することはむずかしいとする回答（25件）の方が明らかに多かった．一方，その希望の強さに違いはあるが，どこが主催するかは別として祖父母同士による学習や交流の機会があればよいとの回答が非常に多くあった．現在，発達障害関連の親の会の中には，僅少であるが，会の事業の中に祖父母向けの講座をセンターとの共催という形で盛り込んでいるところもある（たとえば，愛知県自閉症協会「つぼみの会」）．親の会会員の祖父母だけを対象とした開催には，それぞれの家庭の事情（例えば祖父母と親の関係や夫婦の関係）についての情報が漏れてしまう可能性も大きく，センターが他の団体に協力したりセンターがリードしたりして地域の多くの祖父母を巻き込んだ学習会や交流会を行うことには，それなりの意義がある．自身の子育てを含めて長い人生経験の中で培い身につけてきたもの（価値観やプライドも含む）やそれぞれの現在の境遇はきわめて異なるため，発達障害やその疑いがある孫を持つという点で共通するということだけで気軽に足を向けたり，すぐにうち解けることはむずかしいかもしれないが，親同士がそうであるよ

Akita University

うに，同じ立場の祖父母たちと出会うことで心を落ち着かせ孫の障害の受容と理解が進む祖父母も決して少なくないだろう．きょうだい旅行の開催など，本人や親以外の家族の交流や支援に力を入れているセンターも散見するが（たとえば，富山県発達障害者支援センター），センターが仲介役となり，いくつかの関係組織と模索・協同して「祖父母向けサロン」のようなものを試行的に開催してみることも，今後可能なのではないだろうか．

2. 祖父母のことでの親からの相談

その頻度としては「まれに」が半数を超えるが，大半のセンターが，祖父母のことで親から直接に，あるいは電話やメールなどで間接に相談を受けていることがうかがわれた．また相談の内容としては，「子どもの障害が受け容れられない祖父母への対応」が特に多くのセンターに寄せられている（54件中50件）ほか，「子どもに対する祖父母の接し方への不満と対応」，「祖父母に対する子どもの障害の説明の仕方」，「障害の原因を親にあると責める祖父母への対応」に関する相談も半数を超えるセンターが受けている事がうかがわれた．発達障害の子どもを持つ親にとって，子どもの障害の受け容れや認識・理解は容易なことでなく，このことは両親間における子どもに対する気持ちの共有と一致をむずかしくさせている．またきょうだいへの配慮やかかわり方にもネガティブな形で影響している．祖父母のことでの親からの相談に対して，センター側が適切と思われるアドバイスを親にしたとしても，親の方はそれを受け容れる心のゆとりと安定がない場合が多いと考えられ，そのことを配慮した繰り返しの辛抱強い対応が求められよう．また，親からの相談内容にもよるが，親と祖父母の間で快い合意が得られている場合には，親と一緒，あるいは親の了解に基づいて祖父母のみの来所という形での相談を組み込むことも考えられる．

3. 孫の養育にかかわる負担が非常に大きな祖父母について

親の共働き，育児放棄や虐待，貧困，親の離婚や別居，病気等の事情によって，長期的に「親代わり」的状態を続けざるを得ない祖父母が増加しつつあること，その心身面や経済面での負担はきわめて大きく，このような祖父母への支援を社会的に，また公的な福祉施策として重視しなければならないことが，障害児を孫に持つ祖父母に関する米国の研究の中で指摘されてきている[3)4)]．もちろんアメリカとの文化や歴史の違いを無視してはならないが，発達障害の孫を持つ祖父母に対する発達障害者支援センターによる支援の展開・充実にとっても，このような特に負担の大きな祖父母が我が国の発達障害の孫を持つ祖父母たちの中にもいることの認識や，そのような祖父母に対する支援のあり方の検討が求められると考え，そのような負担の大きな祖父母の存在如何や，そのような祖父母に対する印象や意識について，把握しようとした．その結果，様々な事情によって孫の養育に関わる負担が非常に大きくなっている祖父母からの相談をほとんどのセンターが経験しているが，その数が3人を越えているセンターも半数近くある（59件中30件）ということがうかがえた．またそれらの祖父母について，ほとんどの回答者が，精神的にも，体力的にも，健康上も，また経済的にも大変であるとの印象を受けていることがうかがえた．ちなみに「大変であると思われる程度」については，比率的に体力面がもっとも大きいことがうかがわれた．次に，精神面等の4つの側面に対するものほど強い程度ではないが，自身の生活がない，知り合い等から孤立しがちとの印象ももたれていた．

さらに，「そのような祖父母の存在が障害児の医療や福祉等の関係者にあまり知られていない」という項目については，「そうは思わない」や「わからない」とする回答も半数あったが，「そのような祖父母に対する支援の必要性を医療，教育等の関係者は認識する必要がある」という項目については，程度に違いはあれ，肯定的な回答がほとんどであった．負担の大きな祖父母の存在を種々の分野の関係者たちが知っていないとは言いきれないが，彼らはそのような祖父母に対する支援の必要性の認識までには至っておらずそれゆえ認識する必要があるということが，回答者間でのほぼ平均的な見方と考えられる．

日常的に孫の養育を行っている祖父母の中には，センターを含む地域の中の多様な支援のリソースを知らない人，知っていてもそこに赴く時間的余裕や交通手段がない人，同様の立場にある人との交流がない人の方が，圧倒的に多いであろう．これらの人たちへのより早い情報提供と，それらの祖父母の立場で考えることのできるよき支援者や支援機関との

Akita University

出会いへの導きは，福祉のみならず教育，医療等の種々の領域における家族支援の充実にとって欠かせない課題の一つと考えられる．

V　おわりに

発達障害児の家族支援の充実にとっては，これまで研究的にも支援の実践においても正面から取り上げられることが少なかった祖父母に目を注ぐことも重要である．そして，祖父母に対する支援の重要性や，そのあり方の追究の必要性の認識に依拠した家族支援の展開において，発達障害者支援センターが今後さらに大きな役割を担うことができるだろう．発達障害者支援センターが，他の関連諸機関・団体との連携も重視しながら，祖父母支援への配慮が十分に行き届いた家族支援を展開することは，他の諸機関・団体における家族支援の展開にとっても参考となるし，ひとつのモデルを提供することにもなるだろう．

そのような見地より，本研究では，全国の発達障害者センターに対する質問紙調査を通して，祖父母支援の現状や祖父母支援についての意識などを把握し，センターにおける祖父母支援のあり方を考察した．

今後，親や本人，そのきょうだいとともに，祖父母たち（親の共働きや離婚等で大きな負担を担っている祖父母もいる）にとってもセンターが一層身近な存在となりうるような配慮や工夫が期待される．そのためにも，祖父母からの相談としては，来所による直接的なものと電話やメールなどによる間接的なものとどちらが多いのか，どういう方法でセンターの存在を知ったのか，自発的に相談してくるケースと孫の親から勧められるケースとどちらが多いのか，親と一緒に来るケースはどのくらいあるのか等について，確認することも必要だろう．また，センターが身近な存在になるためには，何よりもスタッフとの信頼関係の成立が欠かせないが，そのためには個人情報の保護に関することはもちろん，個々の祖父母の心情や状況，立場に即して専門性を柔軟に発揮することが欠かせない．幅広い相談内容について，質的・量的にどの程度の意見や情報をどのような方法で伝えれば分かってもらえるのかを，相談の実践と反省を重ねつつ，またスタッフ間での話し合いや研修を大切にしつつ，追究することが望まれる．

県立機関（例えば精神保健福祉センターやリハビリテーションセンター）併設型，社会福祉法人委託型，ブランチ型（例えば複数の社会福祉法人による協働）など，その設立経緯や運営主体・形態はセンター間で大きく違っている．重視する活動や支援の内容，重視する対象者などについても，相談支援よりも就労支援の重視，児童よりも青年・成人への支援の重視というように，センター間で一様ではない．公民による相談事業や福祉サービスの資源，余暇・文化活動の機会等に関して比較的立ち遅れている県において運営されているセンターも多くある．本研究は，どのようなセンターにおいても，また本人が幼児や児童の時ばかりではなく青年や成人となってからも祖父母への直接的支援や，祖父母への支援を視野に入れた家族支援は無視できないと考え実施された．とはいえ，本研究は，祖父母支援の現状やそれにかかわる意識についての包括的・全体的把握への一歩を踏み出したにすぎない．

今後は，筆者自身がセンターやその関係者の方に赴くことをもっと重視し，様々なセンターにおける家族支援の状況や課題をより具体的に把握しながら，多様な形態・多様な背景で運営されている発達障害者センターにおける祖父母支援や家族支援のあり方についての考察を深めていきたい．

文　献

1）「自閉症などの発達障害に関わるニーズと支援の課題」（pdfファイル）
http:// www.pref.aichi.jp/hsc/asca/siryousitu/kadai.

2）今野和夫（1997）障害児の祖父母．障害者問題研究（全国障害者問題研究会），第25巻，第１号，77-85.

3）Force,L.T.（2000）Grandparents Raising Children with and without a Developmental Disability:Preliminary Comparisons. Journal of Gerontological Social Work,Vol.33 (4), 5-21.

4）McCallion,P.,Janicki,M.P.,&Kolomer,S.R.（2004）Controlled Evaluation of Support Groups for Grandparent Caregivers of Children with Developmental Disabilities and Delays. American Journal on Mental Retardation, Vol.109 (5), 352-361.

Akita University

Summary

Family support has been one of the most important roles in support centers for persons with developmental disabilities. Grandparents of grandchildren with developmental disabilities can support their children and grandchilderen in many ways. But it is very difficult for grandparents to understand the nature of developmental disabilities. Support centers for persons with developmental disabilities can take an active role in providing supports for grandparents to be good supporters for their children and grandchildren.

This exploratory study aimed to reveal the present state of grandparents support in support centers for persons with developmental disabilities. A survey of questionnaire was conducted.

I asked staffs of support centers to answer related questions. The results indicated that many of support centers had consultations with grandparents about their grandchildren. Many of support centers had the opinion that they should improve their professional competence to support grandparents. Many of support centers had consultations with grandparents who were assuming the role of caregivers for grandchildren with developmental disabilities.The findings present challenges to support centers to be more attentive to the significance of support for grandparents. Practical implications of the findings were discussed in this paper.

Key words : Support for Grandparents,
Support Centers for Persons with Developmental Disabilities,
Developmental Disabilities

(Received February 13, 2009)